

電子書籍と開かれた読書

——ひとつの実践報告——

海老原 勇

0. はじめに

電子書籍の市場は、紙の書籍と比較すればまだまだ小さいものながら、電子書籍の刊行点数は着実に増えています。電車に乗れば、携帯電話で漫画を読む人、タブレット端末で新聞を読む人をしばしば見かけるようになり、読書のあり方は急速に多様化しています。そうした多様化をもたらしたのは私たち出版人であるわけで、電子書籍のこれまでとこれからについて出版人として考えるべきことがあるのはもちろんですが、私たちは出版人であるとともに読書人でもあって、同じ問題を読書人として考えることも必要です。

私が読書人として考える、読書のあるべき姿とはこうです——読書は自由でなければならぬ。あるいはこう言いかえることもできます——読書空間（あるいは言説空間）は開かれていなければならない。読書というのは一冊の本の中に閉じこもるものではありません。思考はその書籍を超えた深みや広がりを求めるものです。

こうした読書像はあまりにも陳腐であるかもしれません。しかし出版人としても、この原則を日頃貫いて仕事をしていると胸を張って言えるでしょうか。とりわけ電子書籍という未知の領域に足を踏み入れた私たちにとって、「自由な読書」あるいは「開かれた読書」について再考することには少なからぬ意義があるのではないのでしょうか。

これから、このような問題意識について私なりに考えたことを発表させていただきますが、まず一つの視点を導入したいと思います。それは理工書です。私は現在、数学を中心とした理工書の編集を専門にしておりますが、電子データの取り扱いという点において一般に理系の人は文系よりも長けているということがありますし、事実理系の人はここ 30 年ほどの間に、コンピュータを活用した独自の言説空間を展開してきたのです。その歴史と現状を「外挿」することで、電子書籍における自由な読書・開かれた読書の可能性について考えてみたいと思います。

1. TeX——理系人が築いた言説空間

数学・物理を中心に、理工系の人々の多くは TeX（「テフ」あるいは「テック」と読む）という組版システムを使っています。私が仕事で関わった理系研究者に限って言えば、普及率はほぼ 100%です。この TeX は数学者であり計算機科学者でもあるドナルド・クヌース（Donald Knuth, 1938-）が 1978 年にリリースした組版システムで、自著 *The Art of Computer Programming* を出版する際に組版の汚なさに憤慨したクヌースが、自分の納得がいく組版ができるよう開発されたものです。

TeX の大きな特徴として、

- ・フリーウェアである（つまり、無償で使用できる）。
- ・世界共通である。

という二点が挙げられます。つまり世界中の人々が、一つのシステムを自由に使えるようになってきているのです。使用中に発見された不具合はその都度修正され、また機能を拡張するなど、クヌース当人のみならず「有志」によって改善が続けられ、さながらウィキペディアのように充実したシステムとなった TeX は現在、世界の「共通言語」の観を呈しています。複雑な数式を組むのをはじめ、とても高度な機能が備わっていて、組版システムとしてこの TeX を導入している印刷所も少なくありません。また、TeX で作成したデータは PDF にして閲覧することが一般的で、昨今の PDF の普及に実は TeX が一役買っている、というのはいかにあり得ることではないかと思えます。

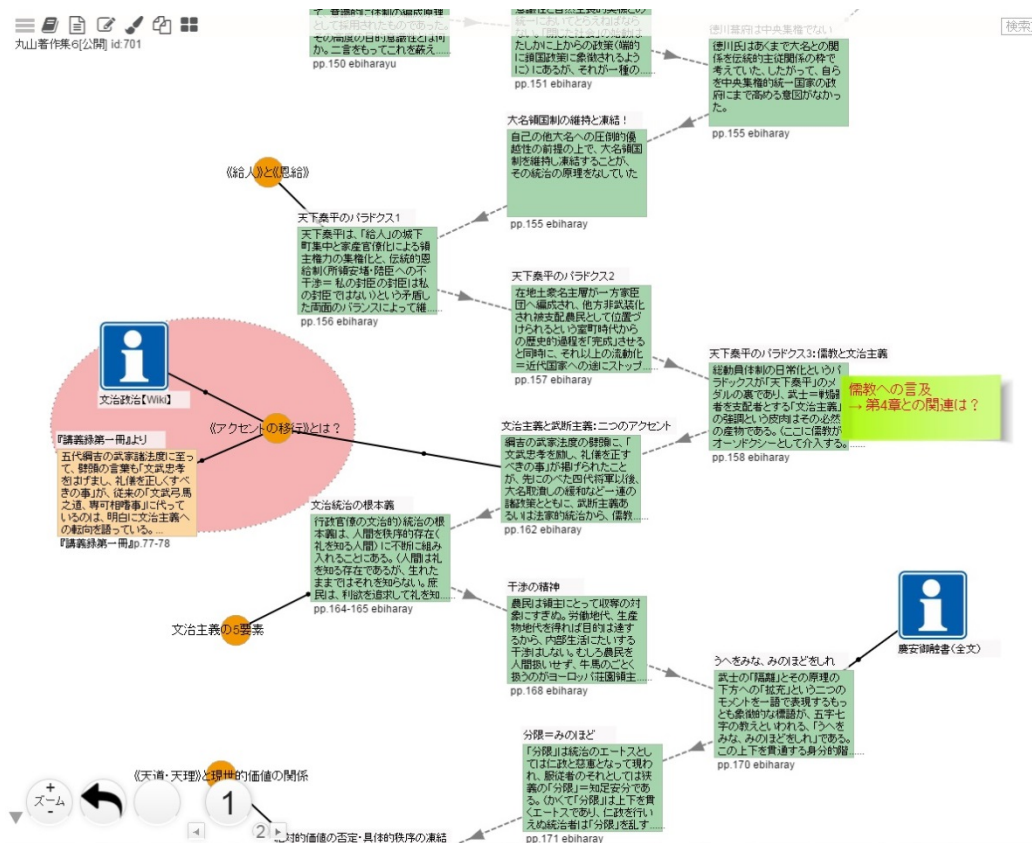
さて、いま PDF に言及しましたが、一般に電子書籍の形式は PDF ではありません。数あるフォーマットの中で少しずつ EPUB に収斂しつつあるように思いますが、今のところ、EPUB では複雑な数式を組むことができないため、数式を含む書籍は人文書に比べて後れを取っているのが現状です。

技術開発が進み、EPUB でも数式を組めるようになる日が遠からず来るかもしれませんが、実は事情はそれほど単純ではありません。TeX はユーザが自由自在に使えるというのが大きなメリットなわけですが、自由が利きすぎるために各ユーザが自分の「方言」を作り上げることがあります。TeX 同士の互換性にまったく問題はないのですが、その他の形式との互換性は決して高いとは言えないのです。EPUB で数式が組めるようになったとして、果たして理工書が電子書籍として普及していくのでしょうか。現在と比較すれば点数は増えるでしょうが、互換性のないファイルを変換するのは「無駄が多い」作業でもあります。TeX を核に開かれた言説空間を築いてきた理工書が、電子書籍に関しては足踏み状態が続いている——皮肉なことです。

2. 『丸山眞男講義録』を読む——ひとつの実践例

電子書籍には別の問題もあります。現在普及しつつある電子書籍は、専用端末か専用アプリケーションを使って閲覧するのが基本ですが、少なくとも現状では「開かれた読書」の可能性が制限されているということです。専用端末を用いた読書では、気になった箇所にマーカーを引いたり、意味の分からない語句を辞書で調べたりする程度のことは可能です。しかしできることと言えばその程度で、さらなる広がりや深みを求めることは難しいでしょう。

ここで、一つの例をご紹介します。私は昨年から約一年にわたり、『丸山眞男講義録 第六冊』を電子化し、デジタル環境のもとに読書するという試みに携ってきました。紙の書籍だった『講義録』——これは「東アジア人文書 100」の中に選ばれている書籍でもあります——を PDF 化したものを読んだわけですが、アドビ社が無償で提供している Adobe Reader は機能が大幅に拡充され、テキストにマーカーを引いたり、自分のコメントを書き込んだりすることができますし、その部分だけをまとめて取り出すことも、さらにはその取り出したデータを加工することも容易です。私が『講義録』を読んだ時には、まず気になる



読書ノート (WuWei) での作業の様子

箇所にマーカーを引きながら読み進め、一つの章を読み終えたところでマーカー部分のみを「引用文」として抜き出し（ここまでの作業を Adobe Reader で行います）、それをインターネット上にアップロードしました（ここは実演をご覧に入れます。一つ一つの引用文が、四角い小窓状に並んで表示されます）。そして、それら引用文を改めて読み返し、不要なものは削除し、残ったもの同士を線でつないでいくことで丸山の論旨を自分なりに再構成し、さらにその過程で生じた疑問や、重要だと思われるポイントなど、つまりは自分の意見（オレンジ色の丸マーク）を足していったのです。思い付き程度のことを書き込む場合には緑色の「付箋」を使いました。

このような読書のあり方は紙の本を読むのと極めて近い、自然な読書と言えますし、引用文を抜き出した後の作業はオンラインで行っているのでも、気になることがあればすぐにインターネットで調べて、その結果をこの読書ノートに付け足していくことができます（青い「i」マークはウェブサイトへのリンク）。また、丸山自身の記述を素材とすることで、彼の記した一字一句に目が向くようになりますから、読書を「広げる」ことが容易であるだけでなく、「深める」こともまた可能です。私の場合、この『講義録』を読むまでは丸山の著作をほとんど読んだことがなかったため、いたずらに拡散していく読み方をするよりもまずはテキストを忠実に読み、そこから発見できる問題点は何か、という意識をもって読んだのでした。

例えば『講義録』第三章では、丸山は「幕藩体制の精神構造」と題して江戸幕府が約 260

年にわたる安定的な政治体制をいかにして確立し得たのか、ということを究明しています。私は丸山が「時代精神」や「精神構造」なるものに言及している箇所注目し、そうした箇所にマーカーを引きながら読み進めていったのですが、読み始めて間もなく、まず二つのことが気になりました。一つにはそもそも封建制とは何か、という問題。章の冒頭、丸山は幕藩体制を封建制と見なせるのか議論していますが、「封建制とは何か」という意識から問題が掘り下げられるわけではありません。もう一つは、徳川政権が樹立してから 70~80 年ほど経ったときに、幕府の統治原理が武断主義（武力をもって制すること）から文治主義（武力に依らず、儒教による教化をもって制すること）へと転換した、と丸山自身「かつてそのように論じた」が、このときの講義では、「文治主義はある意味で最初からあったし、武断主義は最後までそれと併存した」、つまりは「統治原理の変更でなく、アクセントが移動しただけ」と考えが改められていること。

第二の点について少し調べてみると、『講義録』第一冊——これは第二次大戦後間もない 1948 年の講義録で、第六冊は 1966 年の講義をまとめたものです——では、丸山は次のように述べています。「五代綱吉の武家諸法度に至って、劈頭の言葉も『文武忠孝をはげまし、礼儀を正しくすべきの事』が、従来の『文武弓馬之道、専可相嗜事』に代っているのは、明白に文治主義への転向を語っている」。彼は「転向」という表現を使って、武断政治から文治政治への変化を特徴づけています。ウィキペディアで「文治政治」の項目を調べると、「転向」とまでは書いてないにしても、同様に幕府の統治原理が武断から文治へと改まったことが書かれています。

「転向」と考えるべきなのか「アクセントの移動」と考えるべきなのか、ここからこのように問いを立てられることはわざわざ指摘するまでもありませんが、私はそうではなく、なぜ丸山は約 20 年の時を経て「転向」から「アクセントの移動」へと考えを改めたのか、という点に目を付けるのが面白そうだと思います。先に挙げた二点のうちの第一、すなわち封建制をめぐるのは、『講義録』第一冊を繙くと、当時の丸山にとって封建制をいかに理解するかが重要な課題であったことが読み取れます。「開講の辞」（introduction）では、戦後間もない日本においては封建制は歴史的遺物などではなく、「社会のあらゆる部面での根強く残存する封建制の克服が必須の課題として要請されている」と述べるとともに、「いかなる歴史的認識も一つの自己認識である」ことが強調され、過去への洞察を現代への批判につなげることの重要性が説かれているのです。このような丸山の方法論的立場を考慮するならば、封建制に対する考え方の変化や「アクセントの移動」を単に丸山の考えが変わっただけと捉えるのではなく、戦後の時代精神の変化と捉えて、丸山の思想を媒介に一つの精神史を試みることも可能でしょう。こういう問いの立て方は、単に封建制や文治政治の真相を探るよりも、あるいは丸山自身の内的変化を辿ろうとするよりも、ダイナミックな歴史が見えてきそうだと私は思うのですが、どうでしょうか。

ここまで、少し『講義録』の中身に立ち入ってお話ししてきました。このような読書や考察は、紙の書籍でも一般的な電子書籍でも不可能ではありません。しかし『講義録』に関しては、PDF 形式の電子書籍であったこと、またそれゆえに本文を抜き出し、それを一望の

もとにして丸山の議論を整理できたことにより、思わぬ方向へ読書が深まり、そして広がり、意想外の思考の展開を愉快とすら感じたのでした。最後に、こうした開かれた読書のためには、読書経験を共有し議論し合える仲間もまた必要不可欠であることを付言しておきます。

3. おわりに

読者の立場から言えば、テキストを自由に引用したり、さらにそれにコメントを付したりできると便利であることは誰もが認めるでしょう。しかし先にも述べたとおり、現在流通している電子書籍の多くには、そのような自由はあまりありません。

ここで、対照的な例としてふたたび理工書の現況をご紹介します。理工書の中には PDF 形式の電子書籍で売られているものがあります。読者がむやみにコピーできないよう、ファイルに制限をかけることは技術的には容易なはずですが。しかし中には、個人で使用する範囲においては自由に複製することができるものも、売られています。例えばコンピュータのプログラミングの本には雛形となるプログラムが多数書かれていますから、読者は自分の必要なプログラムをコピー&ペーストして利用することができます。しかもファイルの複製ができますから、自宅の PC、会社の PC、通勤中に使うタブレット端末それぞれにファイルを入れることも可能で、読者にとってはまことに使い勝手のよい書籍形態と言えます。

もちろん、悪意ある読者によってファイルがインターネット上に流出することも大いにあり得ることです。複製可能な PDF ファイルを電子書籍として販売することは、読者の良心を信用したうえで成り立っているわけで、こうした出版のあり方をむやみに広げることは危険です。とは言え、理系人が自分たちで作上げた開かれた言説空間を、互いの信頼という前提のもと、最大限享受していることもまた事実なのです。

私は発表の冒頭、「読書は自由でなければならない」と述べました。もう一度問題提起をします。私たちは出版人として、読書の自由性を真面目に考えているでしょうか。「自由とは何か」という問題を考えるに当たり、大事なのは自分自身の先入観を一旦捨ててあらゆる可能性をありのままに受け入れる、つまり自己を開くということです。出版人は本好きであるがゆえ、読書に対して却って保守的な考えを持っている人がいるかもしれません。紙とデジタルの選択肢が与えられたとき、無意識のうちに紙を選んではいないでしょうか。読書が多様化しているということは、その多様性の恩恵に与っている人がいるということであって、私たちは読書の自由性を考えるためにも、その多様性に対して自らを開かなければなりません。それが出版人としての務めであるのです。

大層な結論を申しましたが、これは私自身への戒めでもあるということで、ご容赦いただきたいと思います。

海老原勇（えびはら・ゆう）

1982 年生まれ。2006 年、東京大学教養学部基礎科学科科学史・科学哲学分科卒業。07 年、筑摩書房に入社。「ちくま学芸文庫」編集部所属。シャノン『通信の数学的理論』、コルモゴロフ『確率論の基礎概念』、ワイル『精神と自然』等を編集。